論　文　要　旨

学位論文題目　　接触場面と母語場面における母語話者のくり返しに関する研究
　　―日常的な接触経験と対話者の日本語レベルの観点から―

氏名　　平山紫帆

本研究は、非母語話者とのコミュニケーションにおける母語話者の調整方法の１つである「くり返し」に注目し、その調整の仕方を明らかにすることを目的とした。そのために、接触場面と母語場面の母語話者のくり返しを分析し、非母語話者との日常的な接触経験の多寡によって日本語レベルが異なる相手へのくり返しに違いが見られるかを探った。

本論文は全９章から成る。第１章では、研究の序論として接触場面会話におけるくり返しの重要性について述べ、母語話者の調整方法を明らかにするためには非母語話者との接触経験と対話相手の日本語レベルとの関係を見る必要があることを示した。第２章では、くり返しの先行研究を整理し、本研究が依拠するコミュニケーション・アコモデーション理論を概観した。コミュニケーション・アコモデーション理論はコミュニケーションでの調整行動がなぜ、どのように行われるかを社会心理学の立場から説明する理論である。この概念を用いることでくり返しが行われた原因や接触経験による違いが説明できると考え、本研究の理論的枠組みとした。

第３章では研究課題を提示し、本研究で扱うくり返しの範囲とデータ、及びその分析方法について述べた。本研究の使用データは、分析対象の日本語母語話者８名（接触経験の多い母語話者４名、少ない母語話者４名）と、会話相手である日本語中級学習者、上級学習者、及び日本語母語話者の各１名が一対一で行った初対面会話、計 240 分間分を文字化したものである。これを「総合的会話分析」（宇佐美 2008)の手法で分析した。

第４章から第７章では、会話データ中のくり返しを詳細に分析した。分析では、母語話者のくり返しを「相手発話のくり返し」と「自己発話のくり返し」に分類し、それぞれを「現れ方」と「機能」の 2 観点から分析した。

まず第 4 章（研究 1）では、相手発話のくり返しの現れ方として「生起数」「出現形式」「出現位置」「自発性」に注目した。分析の結果、経験の多い母語話者（BE：Base-Experienced）は少ない母語話者（BN：Base-Non experienced）よりも中級学習者との会話での生起数、再現型、直後、自発的くり返しが多いことが明らかになった。また、BE は、上級学習者や母語話者よりも中級学習者にそれらを多用していた。要求後のくり返しは、接触経験の多寡によらず中級学習者との会話で多く出現した。

第５章（研究 2）では、相手発話のくり返しの機能として「くり返しそのものの機能」と「談話展開上の機能」に着目した。分析の結果、BE は対中級学習者のときに BN よりも伝達内容を重視したくり返しを多用し、上級学習者や母語話者が相手のときに比べて多用していることが明らかになった。談話展開上の機能では、BE はコミュニケーションの流れを支える補強機能が相手の日本語力が低いほど多

かった。

第 6 章（研究 3）では、自己発話のくり返しの現れ方を明らかにするために、「くり返しの生起数」「出現形式」「出現位置」「自発性」について分析した。その結果、BE は相手の日本語レベルが低いほど自己発話のくり返しの生起数と自発的なくり返しが多いことが明らかになった。また、非母語話者との会話で直後のくり返しが多く、中級学習者に対して再現型と補足型のくり返しを多用していた。要求後のくり返しは接触経験にかかわらず中級学習者との会話で多く現れた。

第 7 章（研究 4）では、自己発話のくり返しの機能に注目し、「くり返しそのものの機能」と「談話展開上の機能」を分析した。その結果、BE は非母語話者に対して話を先に進める進展機能が多いことが判明した。また、接触経験にかかわらず母語話者は中級学習者に対して詳述化と明瞭化の機能を多用していた。

第 8 章では研究 1~4 をまとめて総合的に考察を行い、第 9 章で本研究の結論と意義を述べた。

研究 1~4 の結果、BE は相手の日本語レベルによってくり返しを使い分け、日本語レベルの低い中級学習者に対してくり返しを頻用し、くり返しであることが明白な形式を使用し、情報を明確にしたり一体感を促進したりするくり返しを多用していたが、BN は相手からの明らかな反応要求のある場合以外は相手に応じた使い分けをほとんど見せないことが明らかになった。

この違いは、接触経験により相手の言語的な問題への感度が異なることで生まれると考えられる。BE は相手の言語的な問題の程度を察知できるため、問題が多いときは相互理解がなされるように相手に明確な形で「収束(convergence)ストラテジー」としてのくり返しを使用する。しかし、BN は、相手の言語的な問題に敏感に反応できず、相手が問題を明確に知らせてこなければ気づきにくい。したがって、ストラテジーが取られず、相手による使い分けもなされないのである。このような認知的・心理的な違いにより、母語話者のくり返しには接触経験の多寡や相手の日本語レベルによる違いが生まれていると考えられる。

本研究は、接触場面での母語話者のくり返しと接触経験や相手の日本語レベルとの関係を明らかにし、総合的に説明した点で意義がある。本研究で明らかになった具体的な調整技術は、母語話者の異文化コミュニケーション教育や日本語教師養成等に役立てられる。